



誌季
能古博物館だより

能古島の樹木(二)

樹木医 前田幸浩

◆能古の三大スーパー
スターツリー

さて、今回は前置きがずいぶん長くなりました。今回はさつそく本題である能古島の樹木についてレポートいたします。おそらく、こうした特定地域の木本（もくほん）植生について話しをはじめめる場合、その植物社会学的な分類、位置付けから始めるのが筋でありましょうが、今回はそうした話しはぬきにして、能古でとりわけ目立っている大看板的な樹木三種の紹介をしましょう。

名づけて「能古の三大スーパースターツリー」です！

まずトップバッター、

能古島展望台の北北西約一〇〇m地点の大タブノキ。

- 幹 周… 四二〇cm
- 根元周… 四三〇cm
- 枝張り東西… 二三・〇m
- 枝張り南北… 一九・〇m
- 樹 高… 一四・五m

柑橘が植えられている段々畑の隅に生育する、非常にバランスの

良い樹冠を誇る、堂々たるタブノキです。遠目には多幹のように見えましたが、そばへ寄ってみると、一本の主幹からみことな主枝、亜主枝、側枝をのびのびと展開した、風格抜群の大タブノキでした。無剪定で永らえているのがなによりですね。樹齢を推定するのはなかなか難しいのでやめておきましょう…。とはいえ、やはり気になります。根元周から割り出した根元半径がおよそ六八〇mmです。スギ、クスノキ、アラカシ、イチヨウ、サクラ、クロガネモチ、マツ、モッコクの平均年輪幅を求めた、あるデータをもとに、仮に本樹木の平均年輪幅を二・八mmと設定すると、六八〇割ること二・八は…。

また、広島県指定天然記念物「新庄の宮のタブノキ」が胸高直径一mを超えた、ある時期の十七年間の平均年輪幅が、およそ五mm弱と推定されますから、それでいくともっと若いということに…。

さて、能古のスーパータブノキの実年齢や如何に！

タブノキ 写真提供 前田幸浩

つづく二番手、永福寺の南東の大クロガネモチ。



クロガネモチ

幹 周…三三八cm
根元周…六二五cm
枝張り
東西…二〇〇m
南北…一六〇m
樹 高…一八〇m
(目測)

が気になります。土壌の乾燥か、根、もしくは幹に生じた何らかの障害によって水の吸い上げが不十分なかもしれません。なんとか樹勢の回復を期待したいものです。

まわりの樹木にさえぎられ十分な観察ができなかったため、断言は差し控えますが、双眼鏡で見ると、実をつけない雄木と思われる。なお、クロガネモチの平均年輪幅として三・六mmというデータがあります。さてさて能古の長老、クロガネモチの実年齢は…。お待たせしました。いよいよ真打登場！
こちらは同一樹種のペア、白鬚神社 社殿裏の大クスドイゲ二本！



クスドイゲ

東側
幹 周…一三八cm
根元周…二六七cm
枝張り
東西…九〇m
南北…七・二m
樹 高…九・五m
西側
幹 周…一四一cm
根元周…二六三cm
枝張り
東西…八・八m
南北…五・〇m
樹 高…九・五m

「クスドイゲ」耳慣れない名前だと思えます。普通は人の身近に植えられることは無いでしょう。何しろ、幹や枝のあちこちから無茶なトゲを出しますので…。仮に自然と生えてきたとしても、すぐに切り倒されてしまうでしょう。下手に近づくと、血だらけになりかねないからです。じつは、上述のクロガネモチの傍らにも、このクスドイゲに比べれば、まだまだヒヨッコですが、同じ木が生えていました。前回の第四九号季誌能古博物館だよりの巻頭を飾った写真の木です。しかしこれとて今は、しっかり根元で大地との縁は切られていきます。このように、普段は人との接点が避けられがちな樹木ではありますが、神社ではこのトゲゆえに「魔除け」として植えら

れるのでしょうか。

ところで計測した樹体寸法をみると、先述の「スター達」に比べ、ずいぶん見劣りするようには思えますね。しかし、この樹種としては十分「大物」とみなしてよいようです。ただ、不思議なのは、この白鬚神社のクスドイゲ。極めてトゲが少ないのです。地元のご年配の方々にも伺っても、小さいころからこの二本の木ともトゲがあつたという記憶は無い、とのことでした。ご老人達のさらに一世代、二世代前にはトゲだらけの時代があつたのかも知れません。余談ですが、このクスドイゲの葉にタバコの火を軽く押し当てた後、五分ほど待つと死環と呼ばれる黒い輪が表れます。この死環という現象は、モチノキ科やモクセイ科の常緑樹に共通のもので、本樹種を含めた樹木の樹種判定法のひとつとして用いられています。

さて能古島については、「どうもアオキの自生がなさそうだ」という興味深い観察結果が出ています。なぜこの島にはアオキが無いのか、本当に無いのかなど、またの機会に掘り下げてみたいと思います。 完

タブノキ

タブノキ属(常緑高木)

暖地の海岸に多く大木は高さ30m、直径3.5mになる。樹皮は暗褐色。葉は枝先に集まってつき長さ8〜15cm位の長楕円形で先端は少しつきでる。厚い革質で表面には光沢がある。

南冥と鎮西の漢詩人(二)

南冥と原古処

神戸女子大学名誉教授

林田愼之助

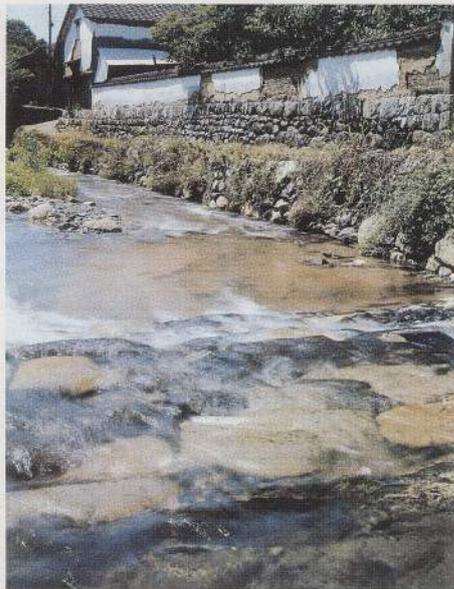
亀井南冥が寛政異学の禁で廢黜の憂き目に
あひ、筑前黒田藩藩覺教授を解任されたのは、
寛政四年南冥五十歳のおりであった。『論語語
由』は、南冥の著述のなかでも代表作にあた
るが、廢黜の時点では、未定稿の状態であつ
た。おそらく南冥は解任後の暇を利用して、そ
の整理と完成に没頭したと思われる。翌年の
冬十月に脱稿。それから十三年を経た文化三
年(一八〇六)、南冥六十五歳のとき『論語語
由』は支藩の秋月黒田藩で翻刻出版されるは
こびとなる。全十巻、南冥の生前に上木のか
たちで陽の目をみた唯一の著述であつた。

秋月藩主黒田長舒とその世子長房はともに
序文をよせて推重しているが、それが本藩の
忌諱にふれた老儒者のために書かれているこ
とを思えば、余程の好意を南冥に抱いていた
ものと思われる。秋月藩には南冥が終生知遇
を受けた家老の宮崎紫溟がいたし、南冥の高
足の弟子であつた原古処が儒官として藩主の
信任をえていたこともあつて、彼らの奔走と
努力があつて好学の藩主をうごかし、『論語
語由』の翻刻に踏みきらせたのであろう。

(3) 第50号

原古処は字を士萌、俗称を震平といい、秋

月城の背後にそびえる秀麗な古処山から号を
とつて、古処山人と称した。甘棠館設立の当
初に亀門に入学。わずかに二年の在学期間で
あつたが、南冥にたいして終生師弟の礼をと
りつづけて変わることがなかつた。南冥も
「詩は震平、文は昱」と称し、わが子の昱太
郎こと、昭陽とならば古処を愛している。
秋月藩に帰つてからは、藩学の訓導をつとめ、
やがて藩学頭取の相談役として学政をおさめ
る地位につき、亀門の学風を鼓吹したので、
南冥廢黜後は、本藩以上に学問の隆盛を招来
した。



秋月風景(「図説 日本の町並」から)

古処山のふところに抱かれた秋月は、今も
なお古めいた城下町の面影をとどめてひっそ
りと息づき、画然と美しい別天地をつくつて
いる。しかも篤志家の熱意で、亀門の筆跡を
展覧に供した「亀陽文庫」が設立され、秋月
と亀門の因縁は現在にいたるまで浅からぬか

たちでつづいている。

この秋月から山ひとつ南にへだてたところ
は、もう豊後の国で、すぐ山紫水明な日田の
町につづいている。そこにとれた広瀬淡窓は、
山越えして秋月を経て太宰府に入り、それか
ら博多に出て亀門に学び、古処とは相弟子の
間柄となるが、そのとき古処はすでに帰国し
て、秋月藩の儒官となつていた。二人の交誼
は南冥没後も絶えることなく、ひんぱんに往
来して友情をあたためている。

その淡窓が「南冥ハ詩文ニ長ズル人ナリ。
学問ハ余リ博キコトナシ。経義ハ論語語由ト
云ウ著述アリ。一旦上木シタルドモ、筑ノ官
府ヨリ指シサワリテ、世上ニ流行スルコトヲ
許サズ。其ノ学問ハ徂徠ヨリ出デテ一家ヲナ
セリ。大略徂徠ノ説ノ己甚シキモノヲ削リテ、
中道ニ適シタルモノナリ。其自称スルハ、朱
物二子ノ域ヲ超エテ、直ニ古道ニ派ルト云フ。
然レドモ之ヲ称シテ徂徠学ト云エリ。」(儒林評)
と評して、南冥の学風の大概をおさえている。

淡窓がいうように、南冥の学風は徂徠学の
系譜のなかにあつた。父の聴因、師の大潮、
永富独嘯庵がいずれも物徂徠の古学を修め、
その人脈のなかではぐくまれた南冥の学問の
中核はまぎれもなく徂徠学であつた。にもか
かわらず、『論語語由』は「朱物二子ノ域ヲ
超エテ、直ニ古道ニ派ル」と、南冥が自称す
るだけの独異性をそなえていた。

『論語語由』は、たしかにあまり博きこと

能古博物館だより

のない南冥の経義校註の仕事では、『春秋左伝考義』とならぶものであるが、南冥に始まる亀門学派の学問の真髄はこの一書にほぼ尽くされているとみてさしつかえあるまい。この書で、南冥が論語に関する漢代の古註、六朝皇侃の義疏、仁斉、徂徠の註説、さらに徂徠学が排斥する朱子の集註をもふまえて、その採るべきはとり、その捨てるべきはすて、それでもなお未詳のことは未詳として経義を明らかにする方法は精実であつても、必ずしも徂徠学に忠実な学者の態度ではなかつた。朱子学派のように孟子と癒着して『論語』を説くことにはなほだしく批判的であつた南冥は、たしかに徂徠学をうけてはいたが、徂徠学の『論語』解義で納得のゆかぬ部分には、批判することをゆるがせにはしなかつた。

『論語語由』は、『論語』のなかの孔子のこゝとばが由つて出ずるところをたずねて、その本旨に迫ろうとした書であつた。孔子の発言が、その対象と時、対応する人と事柄によって微妙に変化していることに留意して、『論語』を読みこまねば、孔子のこゝとばを活きたことばとしてとらえることはできないのではないか。孔子の語り口が事柄の内容と発問者によつて微妙に変化して



論語語由 (秋月府蔵版)

いるが、その由つてきたる理由を考えねば、孔子のこゝとばを死物化することにならないか。——かく考え、かく疑問を抱いたところから、南冥の『論語語由』は発想され、著述されたものであつた。そこに徂徠学を襲いながら、所謂文学的な読みのふかさでは、徂徠の『論語微』から一步も二歩も突つ込んだところで、南冥は論語の本義に迫ろうとしていた。

「語の由りて出づる所を知り、而して其の義は得て言うべし。語由の作る所以なり」とは、『論語語由』の凡例のことばであるが、孔子の発言が対象に応じて微妙に変化している具体的事例をとりあげ、そこに抑揚頓挫のあるリズムを読みとり、孔子のこゝとばを生きた人間教育の場でとらえなおそうとしたのが、南冥の『論語』学であつた。孔子の発言の微妙な変化がどこからきているのか、それに意を注いでいった南冥は、『論語』が修身齐家治国平天下の第一義の書であるだけでなく、そこには実人生の場での緊迫した人間模様のドラマが展開されているとみていたといえる。南冥もまた、その実人生の場で人間教育にしたたかな情熱を燃した儒者であつた。南冥の『論語』学は、彼の人間教育の実体験にねざしていたと思えてならないのであるが、どうであろう。

そう考えるのはいささか根拠がないわけではない。淡窓はまのあたりにした南冥について、「先生ハ極メテ教育ニ長ゼリ。蓋其人才

ヲ愛スルコト、天性ニ出デタリ。人一善アリト雖モ、敢テ捨テズ。中行ノ士モ、亦之ヲ愛ス。狂簡ノ士モ亦之ヲ愛ス。人ニ於テ、唯其長ヲ見テ、其短ヲ見ズ。予ノ如キモノ、極テ懶惰ノ性質ニシテ、自ラ奮フコト能ハズ。然ルニ先生術ヲ以テ之ヲ鼓舞シ、止メント欲スレドモ、能ハザラシム。其ノ教導ノ術、抑揚測リ難シ。要スルニ其ノ人ヲシテ、憤発踴躍、自ラ止ムコト能ハズ。」(『懐旧樓筆記』)と回想しているからである。かく南冥は亀門に集まつてきた子弟の才能と個性をこよなく愛し、鼓舞発奮させた。それは、人間養成を儒教の要諦とみる徂徠学の経世実学の思想にねざすものであつた。

南冥には、その子の昭陽にみられるような体系的な古学による経書校註の学問志向は欠けていた。中途にして挫折し、その実験の場を失つたことにもよるが、南冥の詩人的資質がその志向をさえぎつていたともいえる。しかしながら、経世実学を中心にすえた徂徠学の心は、廢黜の悲運にみまわれるまでの南冥の著作、たとえば「肥後物語」「半夜話」「南遊紀行」、さらには、片々たる戯歌集「古今斉伊呂波歌」にいたるまで、いかなく發揮されていた。そのいちいちの内容については、いづれ触れるつもりであるが、どの著作にも、南冥の現実を踏まえた高い政治理念、人間理念が述べられていて、それは、当時保守的な空気のなかで温存されていた藩の執政、儒者、

医師たちの心胆を寒からしめるに充分なものがあつた。

それはともあれ、南冥の「抑揚測り難」き教導の術と熱い経世の講説は、その門下から幾多の英才を輩出させることになる。江上荅州、国島京山、山口民平、原古処、牧園茅山、永富光国、広瀬淡窓など亀門の英才はいずれも西国の各藩において、或いは儒官となり、或いは私塾を開き、後進の育成にあたり、幕末激動期に活躍する有為の人材を生みだしている。そのもつとも傑出させるものが、広瀬淡窓の私塾咸宜園であつた。そこには、高野長英、大村益次郎、長三州、清浦奎吾をはじめとして明治維新の逸材が雲集した。もともと詩的感性にすぐれていた淡窓は、「余り博キコトナシ」とみた南冥の学問の底についてながれる熱っぽい経世実学の心を、その独特の鋭い感性でみずからのものとしていたのであろう。

能古博物館だより

南冥はこの温厚篤実な淡窓よりも、飄逸な李白的風貌をみせた原古処により親しい好意を寄せていたとみえ、数多い南冥の詩稿のなかには、原古処に贈った詩篇がしばしばあらわれており、ことに「古処山堂即事三絶」の句では、「宇宙茫茫たる際、原萌は独り吾を識る」と歌っている。原萌とは字を士萌とよぶ原古処のことである。古処を唯一の知己と南冥はみていたのである。鹿黜後の南冥はしばらくの間は禁錮同然の生活をおくっていたが、やがて少しは自由がきくようになると、しばしば秋月も訪れて

いる。南冥は雄美なる古処山を背に静かなたたずまいをみせる秋月の風景が好きであつたのであろう。そしてなによりもこの小さな城下町だけは、寛政異学の禁以後も、亀門の学問が受けつがれ、たしかに息づいてきた。その中心に居るのが、藩の学政をとりしきっている原古処である。南冥は居心地がよかつたにちがいない。



「原古処肖像」 秋月郷土館蔵

古処は李白の詩を愛したという。辺幅を飾らない飄逸の気味がただよう古処と向きあつてみると、鬱屈した南冥の心も、自然とほころんだにちがいない。南冥はもとより酒をこよなく愛したが、李白の好きな古処も酒をこのんだ。弟子は先生を迎えると、いつも酒をささげて久闊を叙し、離別の宵もまた置酒して酔いをつくしたとみえる。南冥に「古処原学士に留別す」と題した七律一首があり、そのなかで南冥は「澗水は西に鳴り風瑟瑟たり。斗柄は東に掲り暁蕭々たり。君と日く尽くす平生の意。遮莫あれ参差たる醉態驕なるも」と歌っている。留別とは秋月の古処のもとから博多に帰ってゆく南冥の惜別の情である。おそらくは師と弟子は夜を徹して酔い痴れたのであろう。

文化三年に南冥の『論語語由』を秋月の官府で出版してから七年ののち、秋月の学風も

また一変し、原古処も長くつとめた儒役を免ぜられている。ときに古処四十七歳。南冥が焚死する一年まえのことであつた。

淡窓は「儒林評」のなかで、古処についてつぎのように記している。「原震平。字ハ士萌。古処山人ト号ス。筑前秋月ノ人ナリ。南冥ノ門下ニ於テ、詩人ノ冠ト称セリ。南冥常ニ称シテ日ク、文ニ兎豈アリ、詩ニ原震平アリト。中年ノ後東遊シ、茶山、五山、詩仏等ノ諸家トモ相交レリ。是ニ因テ東方ニ其ノ名ヲ知ル者アリトゾ。古処モ李白ヲ学ビタル人ナリ。天才飄逸シテ、詩人ノ風アリ。卒スル年六十一」。ここに中年後とあるのは、古処が儒官を免ぜられたのちのことであろう。文政十年二月に没した原古処の墓は、今日もなお秋月の小高い寺の裏山にあつて、真向かいに古処山をのぞんでたつている。



古処山（「図説 日本の町並」から）



原古処墓碑（写真提供 甘木市教育委員会文化課）

※次号は「南冥と雲華上人」です。

能古博物館協賛会・友の会

(敬称略・順不同)

〔法人協賛会員〕

- 浄土真宗本願寺派 浄満寺
(医)原土井病院
ワタキユセイモア(株)
(株)福岡メディカル
リース
(株)オールアンドエム
(株)クリニカルデータサービス
福岡校坂郵便局
鬼敷信孝
福岡赤坂郵便局
戸田正義
日清医療食品(株)
福岡支店
(株)福岡経営
管理センター
(株)サンコー
(医)恵光会原病院
(株)西日本シティ銀行
和臼支店
(株)西日本シティ銀行
千代町支店
(株)西日本シティ銀行
香椎支店
(株)西日本シティ銀行
土井支店
(株)西日本シティ銀行
福岡流通センター支店
(株)西日本シティ銀行
新宮支店
(株)西日本シティ銀行
箱崎支店
(株)西日本シティ銀行
久山支店
(有)サンネット
(株)福砂屋
(医)笠松会有吉病院
(有)ウエダ建築社
九州防災工業(株)
(有)西部エレベーターサービス
(有)豊友設備
総合産業(有)
(株)ニッコクトラスト
(株)メイデン
(株)メイトン
(株)ホスピタル
ギヤラリー倉
(医)大乗会福岡原リハビリテーション病院
(医)江頭会さくら病院
(株)ニチロ九州支社
宗教法人善隣教
(株)リコー商会
(株)橋本組
下山工業(株)
学校法人原学園
(協)唐人町プラザ
甘菜館
大和産業(株)福岡支店
社会福祉法人
福岡ひまわりの里
大成印刷(株)
(株)ホームケアサービス
能古映画サークル
(株)岩室商会
特別養護老人ホーム
なごみの里
エームサービス(株)
(株)センタービジネス
(有)トータル・サポート・コーポレーション
(社)福多々良福祉会

〔協賛会会員〕

- 松本盛二 3
南誠次郎 15
中山重夫 10
菅直登 8
早船正夫 15
笠井徳三 7
安陪光正 5
亀井准輔 16
石橋親一 12
木原敬吉 8
坂田貞治 9
原田國雄 7
森光英子 8
永井功 7
緒方益男 7
山本稔 3
田中貞輝 3
武内隆恭 2
白水義晴 8
石野智恵子 15
翠川文子 11
多々羅節子 15
熊谷豪三 6
有江勉 1
山崎拓 1
七熊太郎 7
西喜代松 6
片桐寛子 7
西村俊隆 6
明石散人 6
矢部俊幸 3
上原孝正 3
早船真一 3
西方俊司 5
亀井千秋 3
土生偕子 1
藤井鉄夫 1
添島律子 1
瀬戸美都子 1

〔友の会会員〕

- 伊藤茂 11
水田和夫 6
木戸龍一 10
岡部六弥 15
星野万里子 8
吉村雪江 8
安松勇一 11
上田浩二 9
高田浩一 7
桑野次男 8
藤木充子 12
和田宏子 13
行成静子 12
片岡洋一 15
石川文之 8
都筑久馬 7
横山智一 8
古賀清子 10
宮崎集 7
西政憲 11
岡本金蔵 7
三宅碧子 15
林十九楼 13
宮徹男 15
安永友儀 9
織田喜代治 6
上田博 14
鶴田スミ子 7
塚本美和子 6
伊藤康彦 6
寺岡秀實 4
原田種美 5
奥田稔 7
石橋清助 13
井上敏枝 5
隈丸清次 7
吉富とき代 5
大山宇一 6
川島貞雄 11
岸洋子 13
久芳正隆 9
半田耕典 6
武藤瑞こ 4

- 莊山雅敏 6
吉田洋一 5
永岡喜代太 12
神戸純子 4
渡辺美津子 5
山田博子 11
佐藤泰弘 4
飯田静子 6
神戸聡 5
田里朝男 8
吉田一郎 1
池田修三 10
岩谷正子 3
小川正幸 2
権藤義哉 4
増田義太郎 9
宮嶋熊太郎 9
土井千草 1
松坂洋昌 4
福永実 1
鹿毛博通 4
岡本政憲 11
西政憲 11
岡本金蔵 7
三宅碧子 15
林十九楼 13
宮徹男 15
安永友儀 9
織田喜代治 6
上田博 14
鶴田スミ子 7
塚本美和子 6
伊藤康彦 6
寺岡秀實 4
原田種美 5
奥田稔 7
石橋清助 13
井上敏枝 5
隈丸清次 7
吉富とき代 5
大山宇一 6
川島貞雄 11
岸洋子 13
久芳正隆 9
半田耕典 6
武藤瑞こ 4

- 山崎エツ子 4
小山元治 8
吉瀬宗雄 15
古賀義朗 13
西山正昭 9
市丸喜一郎 11
豊島嘉穂 2
守瀬孝二 2
鋤田祥子 6
甲本達也 15
田本政宏 6
鳥井裕美子 2
濱北哲郎 10
大塚博久 7
辻本雅史 5
松田清 8
杉浦五郎 7
中野晶子 10
大谷英彦 5
野崎逸郎 10
住本霞 5
前田敏也子 15
村上直之 12
村上直之 12
住本直之 12
間所ひさ子 15
伊藤英邦 1
鹿毛光子 1
古賀朝生 1
林正孝 2
井上雷策 2
田中寛治 1
土屋伊碓雄 1
白井京子 7
原礼子 1
小堀百合子 1
原康二 1
原康二 1
杉みどり 6
杉みどり 6
原修一 6
阿部昌弘 6
結城昌弘 6
永石順洋 6
重松史郎 2
藤吉マツエ 5
亀井勝夫 2
岸川龍 1

- 樋口陽一 2
片桐淳二 7
木下勤 9
酒井カツヨ 8
島義博 6
田上紀子 8
中畑孝信 8
西島洋子 15
西島洋子 15
村上靖朝 8
嶽村光男 8
木原光男 6
鈴木惠津子 6
富永紗智子 1
吉村陽子 7
石橋善弘 7
松本雄二 3
岩淵謙治 11
徳重認 1
高根襄 3
高根襄 3
山本雄平 4
原田雄平 4
宮崎和子 4
藤崎和子 4
矢野鈴子 4
寿美電気 4
井上陽一 5
銀座和義齋 5
山本信行 5
森口静生 2
原隆英 2
頃末隆英 2
野見山実 4
藤瀬三枝子 5
香立スミエ 1
吉開史朗 3
山本光玄 4

- 小川道博 1
中山隆史 1
江原幸雄 10
小原富夫 1
筑紫俊一 1
側崎眞智子 1
小山勝子 1
森山純子 1
高田久美子 1
福永力丸 1
佐藤洋子 1
江崎二郎 1
丸山敏子 2
矢野義恵 1
木血敦代 2
小川誠 3
松熊友彦 2
西原正俊 2
石橋順子 3
横田武子 1
谷口澄江 2
柴田優美 2
高根幸子 3
高根襄 3
山本雄平 4
宮崎和子 4
藤崎和子 4
矢野鈴子 4
寿美電気 4
井上陽一 5
銀座和義齋 5
山本信行 5
森口静生 2
原隆英 2
頃末隆英 2
野見山実 4
藤瀬三枝子 5
香立スミエ 1
吉開史朗 3
山本光玄 4

●能古博物館ご案内●

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 12月1日~2月末日の冬季のみ休館
入館料 大人400円・高校生以下無料
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩10分)→博物館
〒819-0012 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2887
FAX(092) 883-2881

ホームページ http://www.nokonet.com/museum
メールアドレス museum@nokonet.com

印刷 大成印刷株式会社

※新規の御加入(先号以後、平成18年3月1日現在)を、記載いたしておらず、何卒ご芳名をご確認ください。
ありがとうございます。
自然と文化の小天地創造
能古博物館の会
協賛会(個人)年間1万円(何口でも可)
(法人)年間3万円(何口でも可)
友の会年間3千円(何口でも可)
(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)
館維持、資料収集、施設整備等の
資金援助を受ける
納入方法 郵便振替 01730960970
財団法人 能古博物館
右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。